シーン2

「ごきげんよう。では、二日目の検査だ」
「今日は限界まで濃縮した君の精液の採取だな」
「だから、たっぷりと寸止め、させてもらうよ。くっくく」

「では、準備段階の処置として体全体への刺激の付与から始めようか」
「ふふふ、正義の味方もスーツがなければこんな手でなでたぐらいの刺激で反応してしまうのだね。こんな生きの良いモルモットは久しぶりで私も興奮してきたよ」
「この割れた腹や、引き締まった腿、芸術品のよう鍛えた体だ。向こうではデータと簡単な触診でしか視れなかったからね。じっくりと観察さてもらうとしよう」
「どうしたのかな？　指で腹直筋上部をなぞっただけだよ。胸筋の下、ここだね。そこから太腿の大腿四頭筋までの反応がとてもいい、データのほうは……おやおや、まるで戦闘訓練を」
「2，3時間行ったかのようなバイタルの数値だね」
「男性器も反応して、勃起が進んでいる。思ったよりも性的刺激への耐性はないのかな？」
「ま、調整するから問題はないよ」

「では、男性器を握って扱いていくか。柔らかく指先を絡めて、シコシコとピストンすると、くっくく、どんどん大きく、硬くなってきてるな」
「好き放題されて興奮してるのかな？　ふぅ～、ふぅ～っ、なんとか言ったら、どう？」
「やはり耳も弱いんだね、その反応、隠しようがないな数値も急上昇している」
「そうだな、次の段階に映るとするか。正義の味方くんの耳の耐性はどのくらいかな。んれろ、れろっ、まさかこれぐらいで負けるなんてことはないよな、んれろ、れろっ♡　れろれるぅ、じゅるぅ、耳全体を唾液たっぷりで、じゅるぅ」
「舐めてるだけだよ、んれろぉ、れろっ、れろちゅぱっ…♡　はぁはぁ……とてもいい反応だ、男性器をシコシコ、扱く手にも反応が返ってきているのがわかるよ」

「それじゃあ、反対の耳は、どうかな？」
「勃起を扱きながら、ふぅ～、ふぅ～っ、やはり感じている。もう隠すつもりもないのか、ふぅ～、ふぅ～～っ、全然、抵抗しなくなったな。くっくくく」
「はぁはぁ……では、手コキと耳舐めによる刺激試験を続けよう。んれろっ、れろれろ、れろじゅる♡　あふ、はふぅ、こっち耳の感度もいいね」
「ゆっくり扱いてるだけなのに、オチンポがビクビク跳ねて、もう射精が近いようだ」
「キミには声での刺激も有効だったね。シコシコ、シコシコっ、うむ、バイタル値に1割程度の増加が見られる。数値的に限界まで来ているようだ」

「だめだぞ？　今回の検査は限界まで精液を貯めるのが目的だからな」
「刺激を止めて一定時間放置、その後にコンドームをつける。と」
「ゴムを付けられただけで、一度落ち着いたバイタル値が上がったな。それではまた刺激付与を再開するとしよう。んれろ、れろちゅば、ちゅぶぅ、今までの計測値で最大値、か？」
「んふ、くふぅ、このまま耳の奥まで舌を突っこんれぇ、ちゅぶ、ちゅぶぅ、んちゅぶぅっ…ぐぢゅ混ぜにしてやろぅっ、んふ、くふっ、んんっ…♡　男性器のほうも、ちゅぱ、ちゅば、カウパーが溢れて、んちゅぼちゅぶ、ゴムの中に溜まってきているのだね？」

「ぜぇはぁ、ちゅぶぅ、ちゅばぶ、んちゅぶぅッ♡　そら、こっちの耳も、んれちゅぶぅ、舌で奥まで混ぜてやろぅっ……ちゅぼ、ちゅぶちゅぼッ、んじゅるぅ、唾液も流しこんれぇ……んぢゅぶぅ、ぢゅぶじゅぶぅ、ちゅぼぶぅッ♡」
「痛いほど張り詰めた先端を、シコシコシコ、シコシコシコっ♡　ほらほらぁ、薄いゴム越しでも充分に感じるだろぅ」
「玉袋を引きつらせて、竿をビクつかせて、くっくく、限界まで溜まったのかな？」
「玉袋でぐつぐつ煮詰まった、濃い精が上がって、出そうなのだろ？　気持ちよく、びゅるびゅる～びゅるるる～、射精したいのだろっ！」
「けれど、今回は耐久試験なのだ。あと10回は射精を止めておこうか」

「男性器の勃起状態で経過を観察、と」
「これなら予想通りの濃縮ができている。うんうん。しばらくは君の耳をベロで、んちゅぶぅ、刺激して、まさか耳舐めの刺激だけで射精するなんて情けないことはないよな」
「大丈夫、計算ではあと10回分は耐久しても大きな問題になることはないはずだよ」
「ぢゅぶずゅぶぅ、んじゅぶぅ、ちゅッ♡　ふぅむ、データはだいぶ取れたね」
「玉袋にも濃縮されきった精液が溜まっていることだろぅ。結果がとてもたのしみだ」

「これは検査とは関係ないけど、キミがそんな顔をするとは、個人的にとてもおもしろい物が見えたよ」
「おっと、そろそろ限界の数値になるな。では、射精段階に移行するか」
「鬼頭のエラの部分を重点的にシコシコ扱いて、同時に先っぽの割れ目もゴム越しにスリスリすって、シコシコシコ、スリスリスリっ、溢れたカウパーがぐちゅぐちゅ亀頭に絡んで、おまんこみたいだろぅ」

「3，2，1、0。はい、射精っ」

「ふふふ、本当に限界だったみたいだね。量も粘度も2倍以上だ。強い快感を感じているようだね」
「おっと、射精したら、少し勃起状態が弱くなっているな」

「サンプルの精液入りコンドームは取り外して保管。男性器の方は、この状態ならフェラでの処理が有用かな」
「あむぅ、まだまだぁ。んちゅぶ、ちゅばちゅぶぅ、一回の試験れ、済むわけじゃなひからね…っ……そらっ、勃起の回復には粘膜同士の刺激が一番で、ちゅぼ、ちゅぼちゅぶぅ、んちゅぶっ、扱いて、んんっ、んぶぅ、あぶぅ、すぐに使えるようにしてあげるよ」
「んぢゅぶぅ、ぢゅぶぶぅ、ぢぅ、ぢぅぅっ、ぢぅるるぅ♡　私のバキュームフェラで、このとおり、すぐに再勃起できたね。ぷはぁ～っ、んんっ、カウパーもだいぶ濃くなって、悪くない味だね」
「精液採取の生体部品として秀逸な資質があるよ」

「では、もう一度ゴムを付けて、んんっ……さ、濃縮精液の製造テストを続けるとしよう」
「数値は初期値に戻っているな。2回めも良い検査結果がでそうだ」
「では、今度は最初から速く、シコシコ、シコシコっ……さっきの射精の快感を体が覚えているのかな？」
「すぐに反応して、すごいそそり立ちっぷりだ」
「コンドームもパンパンに張って、感度も上がっているね、気持ちよかったら、声を出してもかまわないよ」
「検査には影響ないからね」
「キミはこれから正義の味方から精液タンクに加工されるのだからね、情けない声を出しても問題ない。まあ、抵抗するのはかまわないよ。今回はできるだけ射精までに時間をかけて濃縮したものを得るのが目的だからね」
「おっと、バイタルの数値的にそろそろピークが来そうかな。ふふふ、手を話してもびくんびくんと元気でよろしい」

「ふむふむ、データが取れてきた。数字もいい」
「一般的にはキミの男性器はびっきびきにおっ立ったチンポというのかな。破裂して精子をびゅっびゅーっとだしたくて動いているね」
「でも、まだまだ直接の刺激がなければ射精は無理だろうね。くっくく、ヒーローくんも大変だね」
「数値も落ち着いてきたので再開するとするか。亀頭の先を小刻みに扱きながら、左の乳首を摘んで、刺激を与えてみよう」
「おや、乳首をいじられるのは初めてなのか。面白い数値がでているようだ」
「では右も、クリクリ、クリクリっと刺激を与えてあげると、くっくく、右も大きくなって、両の乳首が無様に勃起してきているね」
「そらそら、このままそそり立った乳首を苛めながら、同時に男性器も扱いていくぞ。んんっ、んんっ……クリクリ、シコシコっ。ふふ、数字がまた上がってきたよ、溜まった精液、出したいのだよね？　全てのデータから読み取れるよ」

「けど、射精はダメだ」
「オチンポ扱きを手加減しながら、代わりに乳首を責めてやろう。まさか、乳首だけで射精してしまう情けない結果を出さないよな？」
「今度は左を、強めにグリグリ、グリリっ……だいぶ感度が上がってきて、いいようだな。そらっ、グリリ、グリリっ」
「次は右を、グリグリ、グリリっ。硬く腫れて、ペニス並みの感度になってきてるようだな。グリリ、グリリっ、もっと感じていいぞ……耐えているね。いい進行具合だ」
「これからの実験用に乳首のデータはもっと取っていこう」
「シコシコシコ、グリリっ、グリリっ……刺激に対する体の反応もとてもいい」

「おや、声が出てしまってるね。まあ、さっきも言ったように問題ないよデータもいいものが取れている、グリっ、グリっ、グリグリっ。もう限界って顔してるね。くっくく、けどまだだから」
「今までの検体だと半分が頭がおかしくなってしまったけど、正義の味方のキミならまだ大丈夫」
「次は硬く尖った左の乳首を潰すように、引っ掻いてカリっ、カリカリっ……右の勃起した乳先も、カリっ、カリカリっ、同時にいきり立ったオチンポも、シコシコシコっ♡」

「声への反応も乳首への反応もデータが取れてきたね」
「これなら、バイタルの値を見ながら射精を制御できそうだ。乳首だけ、左をカリカリ、グリいッ、右もカリカリ、グリいッ……予定通りだな、うん、キミの射精のデータは完璧に取れそうだ」
「では、最後に、シコシコ、シコシコと」
「今から楽しみだね。キミが情けない声を出すぐらいに我慢した濃縮の精液を射精するの。この数値なら1回目よりもドロドロの精子が採れそうだよ。びゅるるるる～って、濃いオス汁っ、射精しなさい！」

「んんんっ♡　凄まじい勢いでコンドームが膨れて、濃さも量も、充分すぎるね」
「ゴム越しにねばりや匂いが伝わってきそうだ。くっくくく」